

脈管診療における Vascular laboratory の役割

松尾 汎¹ 大谷 則史²

脈管疾患とは？

動脈と静脈を併せて「血管」と称し、さらにリンパ管を加えて「脈管」と称している。近年の生活習慣病の増加に伴い、我が国の疾病構造が変化し、血管疾患の増加が指摘されている。とりわけ全身の重要臓器の動脈疾患（脳血管障害、心筋梗塞、腎不全、閉塞性動脈硬化症など）の増加が著しく、その殆どが「動脈硬化」と関連するとの指摘もある。動脈硬化は、多くの生活習慣病（糖尿病、高血圧、脂質異常症、喫煙など）とも関連し、それら動脈硬化性疾患の「早期発見・早期治療」の必要性が指摘されている（例：成人病検診、メタボ検診など）。さらには「動脈硬化性病変の早期発見」、「病変の観察」や「治療経過の観察」などに際しても、頸動脈、腎動脈、末梢動脈等の「血管を直接観察する画像診断」および「機能評価」の重要性も認識されるようになった。

また、時に致死的となるいわゆる「エコノミー症候群」（traveler's thrombosis などとも称する）や周術期血栓症とも関連する静脈血栓塞栓症（深部静脈血栓＋肺塞栓症）、さらには quality of life を低下させる下肢静脈瘤やリンパ浮腫などの静脈・リンパ管疾患も近年注目され、その診療に向けて簡便かつ確実な画像診断および機能診断法としての「無侵襲検査法」に関心が高まっている。

血管疾患診断の現況と展望

この様な背景の下、血管疾患の診断も効率よくかつ精度良く行われる必要がある。最も確実な診断法は血管造影検査などの侵襲的検査法であるが、その侵襲性故に安易には実施できない。一方、スクリーニング（ふるい分け、見つけ出し）の為に実施される検査法として、動脈で

は下肢血圧測定による下肢血行障害の評価、脈波伝播速度や頸動脈壁肥厚度などによる動脈硬化度の判定など、多くの無侵襲的検査法が可能となった。また、静脈でも血管超音波検査：静脈エコー、CT および MR などの画像診断の発展が目覚ましく、内でも血管超音波は超音波本来の無侵襲性と近年の機器の進歩、および専門技師の誕生・育成なども相まって、今や日常の血管臨床で必須の検査法のひとつとなった。

Vascular Lab とは何か？

この様に常に進歩し続ける検査機器を活かし切り、さらにそれらを多様化した臨牀に役立てることが必要となった。そこで、威力を発揮できる可能性のあるものひとつとして、Vascular Laboratory (Vascular Lab) が挙げられる。そこでは、必要十分な検査が実施され、依頼目的に対する回答が必要且つ充分に、さらに正確且つ迅速に伝わるのが要請されている。

今回は、「そのためにどの様にするべきか？」を模索するため、「血管無侵襲検査法を、実際の臨床でどの様に使用しているか」の現況など、多くの施設からの報告を受けた。ここで確認されたことは、「それは箱物としてではなく、院内・地域内におけるシステムとしての Lab である」ことである。すなわち、院内・地域内での症例に対して、スクリーニングから精査まで、効率良くかつ精度良く診断し、さらに治療へと導くためのシステムを構築することである。目的の疾患により選択される検査法も異なり、手順も変化させる必要はあるが、それら変化に対応できるシステム作りこそが、今要請されていると言える。

今回の検討結果を現場に持って帰り、それぞれに応じた Vascular Lab 作りに役立てていただければ幸いである。

¹医療法人松尾クリニック

²新日鐵室蘭総合病院